

# 愛媛県における秋出荷に適した 切り花アジサイの有望品種の検討

内田和仁

## Investigation of a promising cut hydrangea cultivar for autumn shipment in Ehime prefecture

UCHIDA Kazuhito

### 要 旨

愛媛県における秋出荷に適した切り花アジサイの有望品種について検討を行った。西洋アジサイ供試 4 品種の中では、収量が多く、切り花長と切り花重が大きく、がく片の色が良い‘シーアン’が、アメリカノリノキ供試 3 品種の中では、収量が多く、花房が大型で美しい円形である‘アナベル’が最も適した。

キーワード：アジサイ，秋色アジサイ，切り花，秋出荷，品種選定

### 1. 緒言

近年、県下の切り花生産者から、作業労働時間が少なく、収益性も高い施設栽培花き品目の選定要望が多い。そこで、草本性のものとは比べて病害虫に強く、植え替えの手間のいらぬ花木で、収益性が高いと思われる秋出荷の切り花アジサイに注目した。

国内で流通している西洋アジサイの切り花は、主にオランダ、ニュージーランド、南米で生産され輸入されたものであり、ほぼ周年流通している。現在、月平均で約 10~20 万本輸入され、特に 3~5 月と 9~11 月に多い。国内では西洋アジサイの切り花を本格的に手がけている生産者は数名ほどで、鉢物アジサイ生産者数と比べて、圧倒的に少ない。西洋アジサイの切り花は、開花直後に収穫したものを「フレッシュ」、開花終了後に緑色に変色したのがく片が、さらに赤色や青色を帯びたものを「秋色アジサイ」と区分される。オランダではおおむね 3~11 月に切り花が出荷されており、その比率はフレッシュと秋色アジサイが 1 対 3 くらいである（北村，2013）。

このように西洋アジサイの切り花は周年流通しているが、国内生産における 12~5 月出荷は、加温や冷蔵処理が必要なため経営的に困難である。季咲き時期の 6~7 月出荷は、出荷量が多いのに対し需要が少ないため単価が安く、収益性は低い。そこで、9~11 月の高単価

の時期に、秋色アジサイや、秋にも開花する品種を出荷することができれば、収益性は高いと考えられる。

秋には西洋アジサイ以外にも、アメリカノリノキの園芸品種‘アナベル’のがく片が、開花時の白色から次第に緑色に変色した「グリーンアナベル」と、ノリウツギの園芸品種‘ミナヅキ’のがく片が、開花時の白色から次第に桃色に変色した「秋色ミナヅキ」が流通する。主産地は、グリーンアナベル、秋色ミナヅキともに群馬県と北海道である。どちらも平均単価が 1 本 200 円以上と高単価なことから、収益性は高いと考えられる。

このように、秋出荷の切り花アジサイ生産は有望と考えられるが、秋色アジサイと秋色ミナヅキは、栽培技術の文献が少ない。また、秋色アジサイは品種名で流通していないことから、栽培に適する品種の情報がほとんどない。グリーンアナベルについては、栽培に関する報告はある（加藤ら，2006）ものの、本県における適応性は不明である。

このため、愛媛県における秋出荷に適する切り花アジサイの有望品種について検討を行ったので報告する。

### 2. 材料および方法

供試品種は、西洋アジサイでは、秋色アジサイに適するとされる‘シーアン’、‘グリーンシャドウ’、‘フ

ファンタジア’、秋に2番花が開花するとされる‘エンドレスサマー’を用いた。アメリカノリノキでは、大型の花房である‘アナベル’、八重咲きの‘ヘイヤーズスターバースト’、アナベルより花房は小ぶりだが茎が固いとされる‘ライアンゲイニー’を用いた。ノリウツギでは、がく片が開花時の白色から次第に濃い桃色に変色するとされる‘ピンキーウィンキー’を用いた。

開花習性は、西洋アジサイは前年の秋に充実した枝の先端に花芽をつけ、初夏に開花する旧枝咲きであるが、アメリカノリノキとノリウツギは春から萌芽した芽に花芽をつけ、初夏に開花する新枝咲きである（清水、2002）。

試験は2009年～2011年に、愛媛県農林水産研究所花き研究指導室の、天ビニルのみを張った雨よけハウス内で行った。栽植密度は畝幅160cm、株間80cmで1条植えとし、各品種5株1区制で、2009年5月16日に1年生株を定植した。施肥量は、基肥に $N:P_2O_5:K_2O$ を各0.64kg/a施用、定植後2年目以降は毎年2月上旬、7月上旬に $N:P_2O_5:K_2O$ を各0.48kg/a施用した。

遮光方法については、株養成期間中の2009年と2010年は、6月5日～9月20日まで、遮光率50%の寒冷紗をハウスの天に展張し、両サイドと妻面に下垂させ地面から高さ90cmの位置まで張った。調査年の2011年は、6月7日から調査日の10月25日まで、2009、2010年と同様に遮光し、特に高温となる7月20日～9月27日は、遮光率50%で幅1mの寒冷紗を地面から2mの高さで株上部に追加展張した。

株養成期間中（2009～2010年）の剪定方法について

は、西洋アジサイは6月下旬に花首から下2～3節目の上部で剪定、アメリカノリノキでは12月下旬に地際から第1節目の上部で剪定した。ノリウツギについては2009年12月25日に地際から40cmの位置で剪定して台をつくり、2010年12月26日に台の位置で剪定した。

調査年（2011年）の‘エンドレスサマー’については、秋に2番花を咲かせてフレッシュでの出荷を想定し、1番花を6月12日に剪定した。剪定は、樹高の半分の位置にある節の上部で剪定する中剪定と、地際から数えて第1節目の上部で剪定する強剪定の二つの方法を実施した。

定植後3年目の2011年10月25～28日に、株の樹高や株張り、開花枝数について調査を行った。なお、開花枝のうち、切り花長が30cm以上で、がく片に傷みがなく、枝曲がりのないものを可販枝とし、可販枝長の規格を、30cm、50cm、70cmとして枝長別本数を調査した。また、開花枝数に占める可販枝数の割合を可販率として算出した。切り花品質については、可販枝の切り花長、花房径、花房厚、茎径、切り花重を計測した。

### 3. 結果

表1に、定植後3年目における樹高と株張りについて示した。西洋アジサイでは、‘シーアン’の樹高が最も高く、株張りも最も大きかった。‘グリーンシャドウ’と‘ファンタジア’は、‘シーアン’と比べて成長量が小さかった。

表1 定植後3年目における樹高と株張り

分類	品種	樹高(cm)	株張り(cm)
西洋アジサイ	シーアン	124.0	179.8
	グリーンシャドウ	71.2	132.2
	ファンタジア	77.6	127.2
	エンドレスサマー 中剪定	93.4	122.0
	エンドレスサマー 強剪定	85.5	102.3
アメリカノリノキ	アナベル	122.7	95.5
	ヘイヤーズスターバースト	81.6	85.8
	ライアンゲイニー	163.0	220.0
ノリウツギ	ピンキーウィンキー	188.9	157.4

表2 開花枝数と可販枝長別本数

品種	開花枝数 (本/株)	可販枝長別本数 (本/株)				合計	可販率*(%)
		30cm～	50cm～	70cm～			
シーアン	41.4	8.2	6.8	0	15.0	36.2	
グリーンシャドウ	23.6	0.8	0	0	0.8	3.4	
ファンタジア	21.6	0	0.2	0	0.2	0.9	
エンドレスサマー 中剪定	0	—	—	—	—	—	
エンドレスサマー 強剪定	0	—	—	—	—	—	
アナベル	36.0	0.3	7.3	20.7	28.3	78.7	
ヘイヤーズスターバースト	24.4	1.0	8.4	1.6	11.0	45.1	
ライアンゲイニー	27.4	0.0	1.6	17.2	18.8	68.6	
ピンキーウィンキー	21.4	0	0	0	0	0	

\*可販率(%) = 可販枝合計数 / 開花枝数 × 100

アメリカノリノキでは、‘ライアンゲイニー’の樹高が最も高く、株張りも最も大きかった。‘ヘイヤーズスターバースト’は、樹高が最も低く、株張りも最も小さかった。

表2に、開花枝数と可販枝長別本数、可販率について示した。西洋アジサイでは、‘シーアン’が開花枝数41.4本/株、可販枝数15.0本/株と収量が最も多く、可販率も36.2%と最も高かった。‘シーアン’の可販率を下げた主な要因は、8月の高温期に発生したがく焼けであった(図1右)。「グリーンシャドウ」と「ファンタジア」は、切り花長が30cm以下のものが多かったことと、がく片の巻き込み症状やがく焼けの多発生で、大幅に可販枝が少なかった(図2)。

1番花開花後に剪定を行った‘エンドレスサマー’については、2番花が開花しなかった。

アメリカノリノキでは、‘アナベル’が開花枝数36.0本/株、可販枝数28.3本/株と収量が最も多く、可販率も78.7%と最も高かった。さらに、70cm以上の長い可販枝数も20.7本/株と最も多かった。‘ライアンゲイニー’は、開花枝数27.4本/株、可販枝数18.8本/株で‘アナベル’と比べて収量が少なく、可販率も68.6%と低かった。‘アナベル’‘ライアンゲイニー’ともに、可販率が低下した主な要因は、がく焼けであった。‘ヘイヤーズスターバースト’は、開花枝数24.4本/株、可販枝11.0本/株と収量が最も少なく、可販率も45.1%と最も低かった。これは、切り花長が30cm以下のものが多かったことと、枝が細くて花房を支えきれず倒伏したことによる(図3)。

ノリウツギの‘ピンキーウィンキー’は、両性花が目立ち、がく片が少なく鑑賞価値が低いことから可販枝なしと判断した(図4)。

表3に可販枝の品質について示した。西洋アジサイでは‘シーアン’が、最も切り花長、茎径、切り花重が大きかった。がく片の色は3品種とも、緑色に周縁部が赤色を帯びた。中でも‘シーアン’は色が濃く、明瞭な覆輪模様となり、鑑賞性が高かった(図1左)。

アメリカノリノキでは、‘アナベル’の花房径、花房厚、切り花重が最も大きかった。‘ライアンゲイニー’は、切り花長は長いものの、花房径と花房厚、切り花重が‘アナベル’よりも小さかった。また、花房の形がアナベルのような美しい円形ではなく、崩れた円形であることから、鑑賞価値はアナベルより劣った(図5, 6)。「ヘイヤーズスターバースト」は、八重咲きであるが、他の2品種よりも切り花長と花房径、切り花重が

小さかった(図7)。がく片の色は3品種とも淡い緑色であった(図5, 6, 7)。

#### 4. 考察

西洋アジサイでは、‘シーアン’の可販枝数が最も多く、切り花長、茎径、切り花重も最も大きく、がく片の色も良いため有望であった。‘シーアン’でがく焼けが多く発生したのは、高温期に追加展張した寒冷紗の幅が1mと狭く、株の上部のみであったため、ハウス両サイドからの光の影響によるものと考えられる。遮光については、70%を超える遮光条件下で管理した株では、がく片が弱くなり、秋色化するまでに多くのがく片が枯れ込んだのに対し、遮光率55~60%で管理した株では枯れ込みの発生が少ない状態で秋色化したとの報告がある(北村, 2013)。また、葉の裏に隠れて光が当たりにくかった‘シーアン’の花房は、9月下旬から始まったがく片周縁部の赤色発色が弱かったため、9月下旬からの遮光率を下げることで赤色が明瞭になると考えられる。そのため、7~9月の高温期と、赤色発色が始まる9月下旬以降の遮光の方法については、今後も検討が必要である。

アメリカノリノキでは、‘アナベル’の可販枝数が最も多く、花房径、花房厚、切り花重も最も大きく、花房の形、がく片の色も良いため有望であった。グリーンアナベルは秋色アジサイよりも単価は安い、新枝咲きのため、秋に枝を収穫しても翌年の収量に影響がないため、毎年安定した収量が見込める。

ノリウツギの‘ピンキーウィンキー’は、がく片数が少なく、観賞価値の面で問題があったため、がく片の多い品種について、今後調査を行う必要がある。

以上のことから、愛媛県における秋出荷に適した切り花アジサイの有望品種は、西洋アジサイでは‘シーアン’、アメリカノリノキでは‘アナベル’であった。

#### 引用文献

- 北村嘉邦(2013): 農業技術体系 花卉編 11 農文協 42の8-42の15.  
 清水良泰(2002): 農業技術体系 花卉編 11 農文協 41.  
 加藤俊介, 高濱雅幹(2006): ハイドラランジア・アナベルのグリーン化と開花調節技術, 北海道立農業試験場集報, 90, 47-50.



図1 シーアンの花房 左) 秋色化した花房【巻末カラー写真参照】  
右) がく焼けした花房



図2 がく片の巻き込み症状とがく焼けの様子 左) ファンタジア 右) グリーンシャドウ



図3 ヘイヤーズスターバーストの株



図4 がく片が少ないピンキーウィンキー

表3 可販枝の品質

品種	切り花長 (cm)	花房径 (cm)	花房厚 (cm)	茎径 (mm)	切り花重 (g)	がく片の色
シーアン	48.9	17.6	8.6	8.6	75.4	緑色に周縁部が赤色を帯びた
グリーンシャドウ	39.7	17.3	9.0	6.4	54.8	緑色に周縁部が赤色を帯びた
ファンタジア	40.2	18.8	9.6	7.3	69.1	緑色に周縁部が赤色を帯びた
アナベル	80.5	24.3	15.0	6.9	58.5	淡い緑
ヘイヤーズスターバースト	60.6	18.3	10.7	4.5	26.4	淡い緑
ライアンゲイニー	110.7	9.6	8.3	48.3	淡い緑	



図5 アナベル



図6 ライアンゲイニー



図7 ヘイヤーズスターバースト